

## 特集：兵士の「生と死」を取り巻く社会

西村 明

アジア・太平洋戦争から三四半世紀が過ぎ、直接に戦闘の経験を持つ元兵士も、戦禍に巻き込まれた戦災経験者も日本社会ではマイノリティとなった。例えば、2019年10月1日現在の人口推計において、80歳（1945年の敗戦時に国民学校初等科1年生にあたる6歳）以上人口の総人口に占める割合が9.07%、89歳（当時国民学校特修科卒業にあたる15歳）以上人口は1.86%である。このうち、戦闘経験や戦災経験がある者はさらに限定される。

戦後50年を一つの契機として、戦争の記憶の継承が社会的課題として認識されてきた。戦後70年あたりからそれまで「語り部」として自らの戦争体験を、非体験者に伝えようとしていた世代が活動を退き、非体験者による「語り部」の役割継承が新たな課題として浮上してきている。広島・長崎の原爆体験や、沖縄における地上戦や本土疎開船の体験、全国各地の戦災都市の空襲体験などは反核・反戦を訴える市民運動との親和性の高さもあって、そうした「語り部」継承をめぐる組織的取り組みが行政も含めて認められる。

それに対して、兵士の「生と死」の実像に迫る手がかりは、日記、体験記、戦記などの書き残されたテキストが中心となっている。そこでは、戦時下において兵士たちが自らの境遇をどのように認識し、敵として対峙した他者をどのように考えていたのかという「兵士の精神構造」については、断片的な形でしか表れておらず、体系的な理解を困難にしている。そうした中、森岡清美や大貫恵美子の学徒兵・特攻隊員をめぐる研究を、先駆的研究として挙げることができるだろう〔森岡 1993, 1995, 大貫 2003, 2006〕。

しかしながら、「兵士の精神構造」の体系的・総体的理解という観点からは、いくつかの課題が残されている。例えば、兵士の多数を占めた農民兵士の精神構造（自己認識・他者認識）はどうだったのだろうか。リテラシーの面で、学徒兵や特攻隊員以上にアプローチが困難な課題である。また、特攻隊員の中でも、生と死をめぐる手記や遺言を多くしたためた高学歴の予備学生に対して、予科練習生たちの置かれた立場や意識に対してはいかに迫れるだろうか。さらに、特攻隊員や学徒兵を含めた生存兵士たちは、戦後社会のなかでどのように自らの戦争体験に向き合い、またその記憶を忘却・変容させたのだろうか。兵士の生や死の意義づけに深く関わった宗教（者）は、戦争遂行とどのように関わったのだろうか。

本特集は、こうした一連の問いを「兵士の生と死」の問題として共有しながら、3年に渡って行ってきた研究会の成果の一部である。青木秀男と西村明によって組織された科研費基

盤C「日本軍兵士の精神構造の分析——兵士の手記を通して」を中核として、関連する研究に取り組む若手研究者に声をかけて年3回をペースに研究会を続けてきた。科研費の研究体制としては、青木が社会学の視点から兵士の生を起点に死を捉え、西村が宗教学の視点から死と超越性を起点に生を捉えることで、精神構造の動態を描き出すという立て付けであった。

そうした当初のねらいをふまえつつ、本特集では以下のような構成となる。

まず、青木秀男は、日本軍兵士の中で最大の階級集団であった農民兵(士)に焦点を当て、彼らがなぜ戦争と戦死を受容したのかを問う。従来の研究のように学徒兵の精神構造との差異ばかりではなく共通性をも視野に入れ、階級的・集団的基盤にも配慮しつつ、農民兵の精神構造の全体像を描き出している。結論として、徴兵と戦死を運命論的に受容し、生の世界の延長で死の世界を捉える此岸志向の強い死生観であったことを指摘する。

続いて、清水亮は、乙種予科練出身者たちの戦友会会報を取り上げ、軍人として「立身出世」の道を絶たれた戦後において、彼らがどのような意識構造を持つにいたったのかを論じている。教育社会学の立身出世論を援用して、学歴認定のロビー活動が地位アスピレーションの充足や「知識人」への包摂という側面をもっていただけでなく、慰霊碑建立にも、戦死者の慰霊顕彰のみならず、彼ら自身の〈集団的功名型立身出世主義〉的価値意識と、一般国民からの卓越を誇示する機能を担っていたことを明らかにした。

那波泰輔は、わだつみ会(日本戦没学生記念会)の戦後史のうち、1980年頃までの3期にわたる会の方向性の変遷・拡張を分析している。わだつみ会は、1958年の第一次解散を受け、第二次では、「行動団体」から学徒兵記念を主眼とする「思想団体」へと性格を転換させた。しかし現実問題への関与を問われ、第三次では「思想団体」の定義を拡張し、その機関誌で天皇問題などを特集することで読者層が拡大したが、そのことは戦没学生記念会の理念の共有を困難にしたことをあとづけている。

宮部峻は、戦時期の真宗大谷派教団を事例に、総力戦体制論を応用して教団組織改革と教学の再編成の関係を論じている。総力戦体制下の大谷派では、体制適合的に教団組織の改革が進められたが、その際「異端」とされていた教学者たちが改革の象徴として動員された。さらには、彼らの戦争協力的な教学が、戦後の教団改革にも活用されていったことも指摘している。

西村明は、元兵士の戦争体験と慰霊への関わりについて、宗教体験をめぐる宗教学的研究の蓄積との接続可能性を検討する。近年の体験中心主義的な宗教理解への批判を踏まえつつ、テキスト重視ではなくパフォーマンスに着眼して「ヴェアナキュラーな慰霊実践」を検討する。その上で、「行為の痕跡」としてのテキスト理解によって、パフォーマンスの視点からテキストを再検討する新たな視座の可能性を示唆している。

この10年ほど、戦争社会学にカテゴライズしうる研究群が活発に展開されてきた〔野上・福岡編 2012〕〔福岡・野上・蘭・石原編 2013〕〔荻野他編 2013-14〕〔好井・関編 2016〕〔戦争社会学研究会編 2017〕。早くは20世紀前半にスタインメッツによる『戦争社会学』の出版があり〔Steinmetz 1929〕、日本でも1970年代に高橋三郎のミリタリー・ソシオロジーの提唱が行われ、戦友会の共同研究が展開された〔高橋 1974〕〔高橋編 1983〕。

近年の研究は、そうした先駆的研究も視野に入れながら、メディア史や表象研究、文化人類学や宗教学なども巻き込んで、より学際的・多角的アプローチのもとに戦争と社会との接触領域の研究が展開されてきている。それらは定性的研究が主であるが、「SSM調査」と「職業移動と経歴調査」に基づいて戦争がもたらした社会的不平等の実態を分析した渡邊勉のように計量社会学の視角からのアプローチも登場している[渡邊 2020]。

本特集は、そうした動向を睨みながら、改めて兵士の「生と死」に焦点を当てようとしたものである。読者諸氏からさまざまな視点からのご批判をいただき、さらなる議論の展開につながることを特集企画者として願っている。

末筆ながら、こうした機会を提供していただいた『理論と動態』編集委員会および査読ご担当の皆様に心よりお礼申し上げます。

(にしむら・あきら 東京大学)